索や，骨転移のスクリーニングに有用であるが，症例7のように受傷後早期には変化が出ないことがある．MRIは受傷直後から変化が出るが，広い範囲の検索には不向きである．初診時点では各種の検査よりも，診る，触れる，動かすといった基本的診察が重要である．画像所見で異常がなくとも局所所見から骨折の疑いがあれば，単なる打撲として片付けず，患者・家族に骨折の可能性を説明しておくことは，紛争防止の観点から大切である．並行して，画像検査を適時追加し，骨折の発見に努めることも怠ってはならない．

［文献］
1）Pham T，Azulay-Parrado J，Champsaur P et al. "Occult" Osteoporotic Vertevral Fractures：Vertebral Body Fractures without Radiologic Collapse．Spine 2005；30：2430-5．
2）Lakshmanan P，Sharma A，Lyons K et al. Are occult fractures of the hip and pelvic ring mutually exclusive? J Bone Joint Surg Br 2007；89：1344-6．

今月の用語　隣に伝えたい新たな言葉と概念

【脆弱性骨折】

英　Insufficiency fracture　または　Fragility fracture

かつて，力学的強度が低下した骨に，通常の骨では骨折に至らない程度の外力（1回の軽微な外傷または日常生活の範囲での使用による）が加わって骨折が生じた場合を病的骨折と呼び，生理的範囲内の力が繰り返し加わることによって正常な骨に骨折が生じた場合を疲労骨折と呼ぶのが通例であった．英語では，前者をPathological fracture，後者をStress fractureまたはFatigue fractureと呼んで来たが，1964年Pentecostは，Stress fractureを，正常な強度の骨に生じるFatigue fractureと，各種の病態によって強度が低下した骨に生じるInsufficiency fractureに分けることを提唱した．同時に，Pathologic[al] fractureは，腫瘍によって弱化した骨に生じた骨折に限定して用いるべきであるとした[1]．

現在，脆弱性骨折という用語は日本整形外科学会用語集にも採用されていて，Pentecostが提唱したInsufficiency fractureと同義に用いられることが一般的である．ただし，脆弱性骨折の中で，強度が低下した骨に，通常では骨折しない程度の弱い1回外力が加わって骨折を生じた場合はFragility fractureとして，Insufficiency fractureとは区別するべきだという意見もあり，完全なコンセンサスはないようである．病的骨折Pathologic[al] fractureについても，Pentecostの，腫瘍に限定する考え方が必ずしも広く受け入れられているとはいえない．したがって，現時点では，これらの用語は著者によってその意味に微妙な差がみられるので注意を要するといえよう．

〈関連用語〉疲労骨折，病的骨折

〈文献〉
1）Pentecost RL，Murray RA，Brindley HH．Fatigue，Insufficiency and Pathologic Fractures．JAMA 1964；187：1001-4．

（NHO村山医療センター　臼井　宏）本誌317pに記載